大野城市歴史資料展示室　解説シート　民俗No.22

注連飾り

大野城市教育委員会

みなさんは正月のとき、玄関の戸口の上に何か飾りつけをしますか？

注連飾りと注連縄

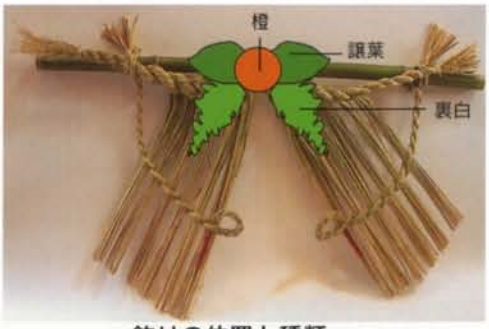
注連飾り

上の写真のようなものを飾りませんか？これは『注連飾り』といい、神社の鳥居などに掛けてある『注連縄』を正月に玄関の戸口の上に飾ることや、正月に飾られた注連縄のことをいいます。

注連飾りや注連縄は藁でできており、それより先が、神聖な神の場所であることを示しています。「注連」という字は「標」とも書き、場所を限るために縄を張るなどして標とするもののことをいいます。そのため、注連縄は「標縄」とも書き、また注連縄の藁が垂れ下がった部分を七本、五本、三本と垂らすために、「七五三縄」とも書きます。縄の綯い方には、右綯いと左綯いがあり、神に関係するときは左綯いをします。

むかしの正月は、歳神（豊作の神または家の先祖の霊）を迎える大切な行事でした。そのため、正月に掛ける注連縄は、神の依代や新年の幸せを呼び込むものと考えられ、神棚・仏壇・門口・戸口・勝手口・竈・井戸・便所・納屋・蔵・小屋などさまざまな場所に飾られました。玄関に飾る注連飾りのほかに、門口に掛け渡すのを門注連、便所・納屋・諸道具に掛けるのを輪注連と呼んでいました。

注連飾りの形



飾りの位置と種類

注連飾りも注連縄も、地域によってさまざまな形があり、特に注連飾りは、大野城市や福岡市周辺で表の写真のような竹を使った形が多いようです。注連飾りや輪注連には、橙（だいだい）・裏白（うらじろ）・譲葉（ゆずりは）などをつけます。これらは鏡餅にもつけますが、橙は「代々家が続く」、裏白は「白髪になるまでの長寿」、譲葉は「家を代々譲る」といったように、語呂合（ごろあ）わせで人々の幸せを願ってつけられたといわれています。また現在では、注連飾りは正月の必需品のようになっていますが、旧正月を祝う農家などでは飾らないところもありました。

注連飾りのその後

注連飾りなどの正月飾りは、正月に飾ったあといったいどうするのでしょうか？

むかしは、１月６日に竹と藁を組み、７日の朝早くに村の三叉路（さんさろ）で正月の書初めなどと一緒に焼いていました。このことをほんげんぎょうといいますが、現在はどんと焼きともいい、地区や子ども会などで７日か14日前後の休日に行っています。

『しめ飾りを作ろう』

歴史資料展示室では毎年12月の「ふれあい歴史体験」で、注連飾りを作っています。注連飾りには、さまざまな形がありますが、2004年は写真のような鶴と亀の注連飾りを作りました。

ふれあい歴史体験の様子

鶴の注連飾り

藁についてもっと知りたい方は、『大野城市の文化財』第37集をご覧ください。 (2005.3.31)

亀の注連飾り

引用及び参考文献

・西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部編『福岡県百科事典』西日本新聞社(1982)
・山本三千子『【四季の行事】のおもてなし』PHP研究所(2002)
・新村出編『広辞苑』岩波書店(1998)
・松村明監修『大辞泉』小学館(1995)
・梅棹忠夫ほか監修『日本語大辞典』講談社(1990)